



さえずり

会長 根津 江美子
(長岡市立上小国小 教頭)

リコーダーの魅力

～ 全日本リコーダー教育研究大会・沖縄大会に参加して ～

顧問 中村 毅

昨秋全日本リコーダー教育研究大会が沖縄で行われ、本県から樋熊理事長、小池前会長、嶋見副会長（年齢順）と一緒に参加してきました。全日音研も控えた沖縄県の音楽教育界の熱気と勢いを感じるとともに、昔お世話になったOBの方々からは、新潟県の大先輩たちにくれぐれも宜しくとの伝言を賜りました。

41回を数えるこの研究大会。本県では長岡2回、佐渡1回と過去3回開催され、再来年度には再び佐渡開催が予定されています。私にとっては、今回の大会で文部科学省教科調査官、津田正之先生の講演で「リコーダーの魅力」を再認識できたことが大収穫でした。



佐渡裕氏とリコーダー

これは、津田先生が指揮者の佐渡裕さんにインタビューされた時のお話だそうですが、それを待たずとも佐渡さんとリコーダーの関係は有名です。

「家や学校でいつもリコーダーばかり吹いていました。TVの主題歌など、すぐに聴き取って吹くことができるという特技がありました。『タイガーマスク』の主題歌は得意のレパートリーで、僕がリコーダーを吹いてみんなが歌うということがよくあったのですが、クラスが明るくなったり、結束感を感じたり、音楽はいいなと思う瞬間でした。」「学級担任の先生は音楽が得意というわけではなかったけど、そういう僕を認めてほめてくれました。だから音楽が好きになったんです。」

「認めてほめる」ことは、音楽に限らず全ての教師にとって必要不可欠な心得です。

リコーダーの教育的価値

「なぜ、学校でリコーダーを扱うのでしょうか。」との問いかけがありました。言い替えれば、「リコーダーの教育的価値は何か」ということでしょうか。当日の津田先生のお話と私の考えを合わせると次の通りです。

- 1 楽器として、個人購入可能な価格で全員に持たせることができる。



- 2 発音が容易で、吹けば誰でも音が出る。（他の管楽器はそうは行きません。）
- 3 楽器としての価値が高い。（楽器として精巧で、奥が深く、極めて高い表現力を求めることも可能。古今東西たくさんの楽曲・演奏家が存在。）
- 4 1人から大勢まで楽しむことができる。（ソロ・アンサンブル・合奏）
- 5 他の管楽器への移行の可能性もあり、その意味での系統性や発展性がある。
- 6 優れた作音楽器で、全身を使って表現できる。（自分の息、身体を通して、自分の心や気持ちを直接的に表現しやすい楽器）
- 7 息を合わせる、人とのコミュニケーションが可能である。
- 8 音楽づくりを学ばせやすい楽器である。

改めて教育楽器としてのリコーダーの素晴らしさを実感し、ここにもリコ研の原点があると考えます。児童生徒を介しての私たちの仲間の輪が広がることを願ってやみません



第42回 県リコーダーコンテストに参加して

佐渡市立真野中学校 石川雄一

当校のリコーダー部は13名で活動をしています。特設部のため、大半の生徒が運動部との掛け持ちをしており、練習時間は極めて限られています。その中でも、「最良の演奏をしたい」との思いから、休み時間や部活動のない日に集まって練習を重ねています。そんな熱意ある生徒を前にして、これまで吹奏楽部の指導の経験のみだった私は、赴任当初、リコーダー指導に大きなプレッシャーを感じていました。しかし、佐渡地区リコーダー教育研究会の皆様から多くのアドバイスや御指導を頂き、自信をもって指導を行うことができています。



リコーダー部の練習で大切にしていることは『お互いの音や息を合わせること』です。これは、他者に意識を向け、他者と協力し、言葉なしでの意思疎通を密に行わなければ為し得ないことです。

コンテストに参加し、他団体のみなさんの演奏に臨む姿勢、指揮者の先生と心を通わせながら演奏している姿などを見て、生徒たちは大きな刺激を受けたと話していました。息の入れ方や演奏法だけではなく、言葉なしのコミュニケーションの大切さについて、他の学校から学ぶ点が多くありました。今回の経験を生かし、今後も更に練習に励んでいきたいと思います。本大会の主催・運営をしていただいた皆様に感謝致します。ありがとうございました。



貝野小の伝統『全員リコーダー』

十日町市立貝野小学校 宗村 小百合

貝野小学校リコーダー部は、リコーダー部創立以来毎年4～6年生全員が所属し、全員でリコーダーコンテストに出場している、正に『全員野球』ならぬ『全員リコーダー』で取り組んでいます。

その中で30年連続全国大会出場を果たしてきている子どもたちは、本当に凄いと毎年感じています。

児童全員が所属するのですから、中にはリコーダーが得意でない子も当然います。「あ～、何でリコーダーなんてやらなきゃいけないんだよ。」という素直なつぶやきも聞かれます。しかし、そんな子どもたちも、夏休みが過ぎ、県大会が近づくとつれて「やるなら金賞をとりたい!」「今まで先輩方が築き上げてきた伝統を守りたい!」という思いが強くなり、苦手な子も休み時間を返上して練習に取り組んだり、リコーダー担当の先生に個々に指導を受けに来たりします。個々のレベルも気持ちもバラバラのスタートから、徐々に23人の心が一つにまとまってきます。・・・と、文章にすれば簡単ですが、そこに行き着くまでには毎年数々のドラマがあります。しかし、そんな数々のドラマがあるからこそ、結果が出た時の喜びは大きいのだと思います。「貝野だから金賞がとれる」のではなく、毎年プレッシャーと葛藤と戦い、日々の努力を積み重ねた成果、正真正銘の「金賞」なのです。

子どもたちの県大会の振り返りに「周りの人の大切さを学んだ」という記述がありました。指導してくれる先生、励ましてくれる友達、応援してくれる家族、色んな人々の支えの元に自分たちのリコーダー部があることに気づきました。コンテストは、子どもたちの心を大きく成長させてくれる場でもあります。そのことを忘れず、全日本リコーダーコンテストにも全員で一丸となって臨みたいと思います。



県リコーダーコンテストに参加して

クラルテ・リコーダーカルテット 志田梨花子

こんにちは。私達は「クラルテ・リコーダーカルテット」です。メンバーは、ソプラノ五十嵐由美子、アルト佐藤美香、テナー志田梨花子、バス高橋麻衣子です。全員が魚沼市守門在住、子育て真っ盛り世代。それぞれが仕事を持ちながらも、平成26年8月結成以来、月2回の練習を続けています。ようやくアンサンブルの楽しさに気づき始めている、この頃です。「初心者の方もお気軽にご参加ください」と要項に書かれていた言葉に勇気を得て、今回初めて県リコーダーコンテストに参加させて頂きました。コンテストのステージでの発表が大きな目



標になれば良い、との思いで参加いたしました。しかし、思いがけず銀賞と奨励賞まで頂くことが出来、思わず涙してしまったメンバーも……。大きな励みとなりました。当日の会場でも、沢山の方から温かく言葉をかけて頂きました。

まだまだ歩き始めたばかりの私達ですので、レパトリーや発表の場の開拓等、やるべきことが沢山あります。いつか、何か素敵で楽しい事が出来たら・・・と夢を持って、少しずつ歩いていきます。

【編集】

グループ名のクラルテ(claret)は、フランス語で「光」「輝き」「光明」の意味だそうです。最後に書かれた、「何か素敵で楽しい事ができたら…と夢を…」の「夢」が「クラルテ」なのでしょうね。今後は、県リコの活動に参加していただけますよう、お待ちしております。

第42回 県コンテスト 金賞受賞校

11月26日(土)に開催されました、県コンテストでは、今年も素晴らしい演奏が繰り広げられました。金賞に選ばれたステージを以下に紹介いたします。3月26日に開催されます、全日本リコーダーコンテストでも、金賞・花村賞を目指していただきますよう、ご期待申し上げます。

小学生の部

<四重奏>

- ・ ラズジャズ 魚沼・堀之内小

<五重奏以上>

- ・ 「パスティッシュ組曲」より I・II・IV 南魚沼・北辰小

<合奏>

- ・ アイリッシュ・エア・アンド・ダンス 十日町・馬場小
- ・ ニューヨークの印象 魚沼・堀之内小
- ・ バレエ音楽「くるみ割り人形」より 十日町・貝野小

中学生の部

<独奏>

- ・ 「4つのバガテル」より 妙高・妙高高原中

<二重奏>

- ・ アフリカン・デュオ 新発田・紫雲寺中
- ・ 「ソナタ へ長調」より 佐渡・両津中

<四重奏>

- ・ 「バラの香り」より 1・2・4 佐渡・真野中

<合奏>

- ・ イントラダ・ソング・ダンス 新発田・紫雲寺中
- ・ 「世界の5つの都市」より 佐渡・両津中
- ・ ロートリンゲン地方の恋の歌 佐渡・南佐渡中

一般の部

<独奏>

- ・ リチエルカータ 第4番 三条・庭野 宏樹



お話とリコーダーの融合をもとめて

～ オータムコンサートより ～

会長 根津江美子

今年もリコ研メンバー+αでオータムコンサートに参加しました。マンネリ化を解消しようと、永井先生と相談し、今年は、絵本「そらまめくんのベッド」(なかやみわ作)の朗読と音楽を組み合わせることにしました。一人一人の持ち味を生かす楽しい発表になりました。また、会場で聴いていた方々のアンケートでも、今回のコンサートの中では、最高の褒め言葉をたくさんいただくことができました。小さいお子さんからも、映像とリコーダー音楽、朗読が心地よく融合していたので、楽しんでもらえたようです。



<構想段階>

- ① ストーリーがはっきりしていて、変化のある絵本を探す。
- ② 同じBGMでいけそうな場面で、お話を区切る。
- ③ メンバーに紹介して、その場面にあう曲探しをする。曲は様々なリコーダー曲集や今までメンバーが吹いてきた曲から選択。

<練習>

- ④ 交代でできるようにメンバーを半分に分け、朗読をする人と演奏をする人を決める。
- ⑤ 実際に朗読する中で、曲のどの部分をどう演奏するといいか(曲の長さも含めて)を練習の中で決めて練習する。
- ⑥ 朗読の仕方(群読にする等)や、音の表現(卵が割れる音をペットボトルで表現等)も話し合いによって充実させていく。

<本番>

- ⑦ パワーポイントで映像を会場に映し出す。
- ⑦ ストーリーの展開に合わせて、朗読とリコーダー演奏を進める。

「そらまめくんのベッド」のあらすじ

そらまめくんは、自分のベッドが大好き。友達の枝豆くんやさやえんどうくん、グリピーの兄弟が「貸して」と言っても「やだよ」と少し意地悪を言って貸してあげません。

ところがある日、そのベッドがなくなってしまう、懸命に探します。最初は友達も冷たかったのですが、かわいそうになり一緒に探します。やっとのことで見つけたベッドには、うずらが自分のたまごを寝かせていました。たまごの様子が気になって、ずっと見守っていたそらまめくん。そのたまごがかえり、そらまめくんが喜びます。そして、みんなでパーティーを開き、最後にはいっしょに寝るといふ、ハッピーエンドで終わるお話です。

使用した曲

- ・タベの舟遊び（ルネ・マッティス）・私の友だち（スザート）・ロンド（メッツガー）
- ・めぐりあい（アンドレ・ギャニオン）・8つのロシア民謡から「悲しみの歌」（リヤードフ）・新緑（諸岡忠教）

出演者の感想

オータムコンサートも回を重ねるごとに聴衆の層が広がり、「私たちの先生が出ているっ！」と言うことで、保護者や子どもたちの顔が多くなってきました。その方々にストレートに楽しんでいただける内容だったと思います。また、オータムコンサートの掲げるテーマ「聴いて楽しい、見て楽しい、参加すればもっと楽しい！」にぴったりの発表でした。

さらに、私がまだ現役で音楽の授業に携わっている身であれば、自分も授業の中でやってみたいと、大いに触発される内容でした。これは、オータムコンサートの「研修」としての側面をかなえるものだと思います。加えて、リコーダー部門に対して「もっと親しみ易さを・・・」と願う上部役員の方々にも、受け入れて頂けたと思います。まっ、これは蛇足ですけどね。何よりもやっていて、私自身がとっても楽しかったこと！これが、1番です。以上の意味で、この新機軸を提案してくださった根津新会長さんに、最大の感謝を表すものです。ありがとうございました。

新しく打ち出したこの方向、少なくとも3年は続けるべきです。この次は、リコーダーの頭部管だけで音を作ったり、孔を全部塞いで管内を拭く棒を出し入れしたり、先端を水に浸したりして演奏する等、「リコーダーって、あんなこともできるんだあ・・・」ってなことも加味したら、なお面白いかなあなんて、ボケ始めた頭で考えています。（前田英也）

いつもは、決めた曲を、それぞれの担当楽器でアンサンブルすることで終始していました。練習で相談して詰めた内容を当日きちんと演奏することに慣れて、あまり感動が無く、マンネリ化していたように思います。でも、それなりに緊張感があり、それはそれで、うまくいき感激していました。

しかし、今回は、何だか感触が違いました。語り・映像・音(音楽・擬音)・演出がうまく構成されました。私は、休み勝ちでした練習過程では、きっと楽しみながら、相互にアイデアを出し合い、演出を構成していったのでしょうか。

「やっていて楽しくてしょうがない。」「いつもの演奏だけの感激とは、色合いが違う。」「きっと『そらまめくんのべっど』が、絵本と活字を読み聞くだけより、大きく映し出された映像とうまい語り、そして、場面の雰囲気にもぴったりだったBGMの名演により、映画やオペラを見ているかのごとくに銘上演された」からかと思えます。来年度のストーリーは何か、とても楽しみです。（樋熊三津男）

今回の取組は、オータムコンサートとしては新しい試みですが、学校の教育現場でも十分に活用できると思います。

- ・ リコーダーを使って学習発表会の劇のBGMをする。
劇を演じる人とリコーダーで演奏する人を分ける。大人数の学校では有効です。
- ・ 音楽の授業の中で1年のまとめの演奏会にするなど。

教師の工夫次第で様々な活用ができます。興味がある方は、台本がありますので、根津までご連絡ください。子どもが楽しめるリコーダー授業を行うことをめざして、いろいろ工夫してみましょう。



リコーダーの息づかい 第4回

～ 「リコーダーが鳴っている音」とは ～

リコーダー奏者 太田光子

新潟県リコーダー教育研究会のみなさま、こんにちは。
リコーダー奏者の太田光子です。

前号の最後で、以下の質問をご紹介しました。

- ・ 楽器が鳴る人と鳴らない人との違いはどこにあるのでしょうか？どうすれば楽器を鳴らすようにできるのでしょうか？
- ・ 楽器を鳴らし、よい音を響かせる息のポイントをつかむ、あるいはつかませる方法を知りたい。

この連載において大変本質的と言える、とても興味深いご質問ですね。

リコーダーは、ただ音を出すだけならば簡単です。ご質問の意図は、「その楽器が本領を發揮しているような、美しく鳴らせている状態か、そうではないかの違い」でしょう。

前号でも「美しい音」、「ちょうどよい息量」等々お話ししていますが、それではいったい「リコーダーが鳴っている美しい音」とは、どんな音なのでしょう？

その音を出すためには、どんな息が必要なのでしょう？

どのような音が美しいのか、という話は、個々それぞれが目指す音によっても、曲の中でどのような表現をしたいかによってもケースバイケース、人によってもおそらく全く違うことでしょう。

柔らかく静かな音がきれい、と感じる人、伸びとハリのある、澄んだ音がきれいと感じる人、

空気を含んだような雑味のある音が良いと感じる人・・・。

ここで、私の思う「リコーダーが鳴っている音」を定義します。

楽器のタイプにより差もありますし、好みはいろいろあるでしょうが、プラスチックリコーダーを含む、一般的なバロックタイプの「鳴っている音」は、

【安定した響きと深さを感じさせる、透明で澄んだ伸びのある音】だと思っています。

これが「いつものいい音」で、これを基本としてそこから曲の中の様々な表情に応じて、例えば音色をくすんだ感じにしたり、ハリのある輝かしい音にしていったり、変化させていくと、その差も出やすく効果があるでしょう。この基本がないと、その変化も感じにくく、非常に頼りなくよりどころのない音楽になってしまうでしょう。

よく「鳴らしている」と勘違いしてしまうのが、「たくさん息を入れる=鳴らしている」と思い込んでいる例です。多すぎる量の息を吹き込み、本人は大きな音で吹いている気になっているのですが、シャーシャーと雑音交じりの耳障りな音で、響きが少なく音が伸びないため、客席など演奏者から離れたところで聴くと、かえって痩せた音に聞こえてしまい



ます。これでは息の無駄遣いで、演奏者本人も疲れますし、いろいろ損していますね。

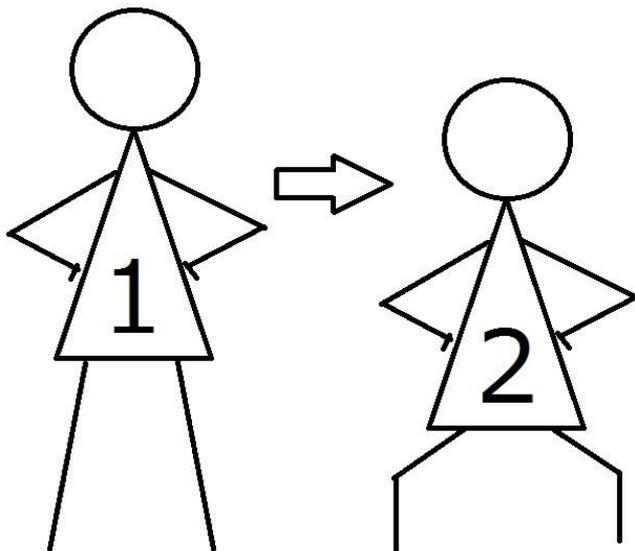
注意したいのが、「**基本の音**」(いつものいい音)は、

- 1、雑音(シャー、ビー等々の)の入らない、澄んだ音。
- 2、その上で、自分のリコーダーに適した息(楽器によって適した息の量はかなり変わります)を入れる。

この2番目が難しいですね。リコーダーに多めの息を入れると、張りつめ過ぎた感じの音色になりますがそこでもなく、息の量を弱くすると、ふにゃふにゃした情けない音になりますが、それでもなく・・・。

私がよくレッスンで行う、「その楽器に適した息の量、美しい音」を掴むコツを試してみてください。きっと「適した息」が実感できることと思います。

- 1) まず、前回の図1の2の姿勢を取ります。※さえずり H28-2号、p.5 参照



- 2) 次に、喉と口を「低い声の『おー』の形」にします。

※さえずり H28-1号、p.10の(5)を参照。

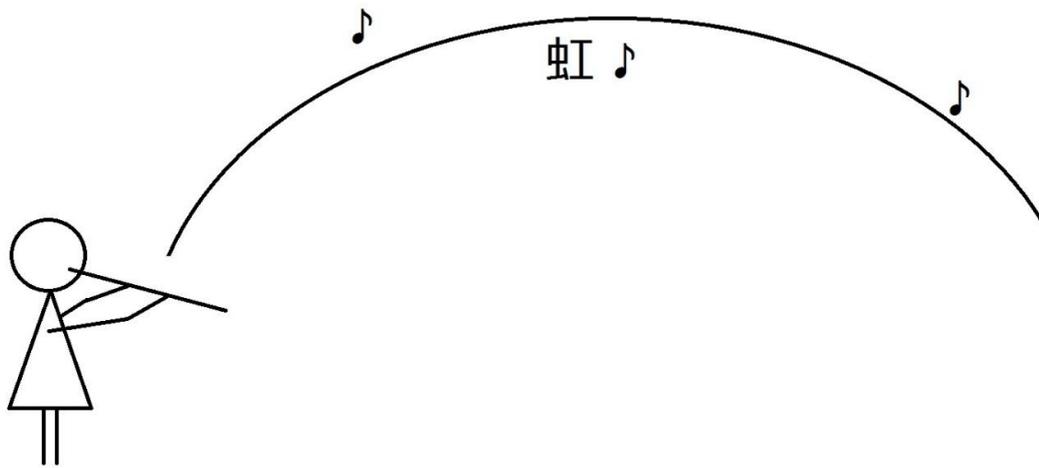
- 3) その状態でリコーダーを構えて息を吹き込み、少しずつ息を強くしたり弱くしたりしてみましょう。

途中で、**澄んだ音で「ぼわっ」と響くところ**があるはずです。そこがその楽器の「鳴っている」、ポイントを掴んでいる息です。

(レッスンで実際に行うと、吹いている生徒さん自身そのポイントをかなり自覚できて分かりやすいことなのですが、紙面上でこの音色の差について表わすのは、至難の業です!) ポイントが見つからなければ、息を強くしたり弱くしたりするのを、よりゆっくりとやってみてください。

ポイントを掴んだら、その息のまま、前回の「虹」を出してみてください。

※H28-2号、p.6 参照



こうすると、安定した響きと深さを感じさせる、透明で澄んだ伸びのある音を得られやすいです。

「そんな音色の微妙な変化、自分に分かるのか？」と不安になりますか？
大丈夫です！私がこれまで教えてきた生徒さんのほとんどが、ポイントを押んだ瞬間、とても嬉しそうに、「あっ！」という表情をします。そして、「自分の楽器が鳴らない、鳴らない」とがんばって吹き込んでいた生徒さんほど、**ポイントを押んだ瞬間に使っている息の量の少なさに驚いていることが多い**です。

同じ製作家による同じモデルの楽器を吹いても、**一本一本ポイントはかなり違う**ことが多いので、複数のリコーダーを使いこなしていらっしゃる方は、**それぞれに適した息の量を探ってみてください**。

ただし、その時はポイントを押めたようでも、その状態を保ち続けられない、と思う方が多いと思います。私が長年やっていた「息のトレーニング」の方法について、次回からそろそろお話しし始めたいと思います。このトレーニングをしていくと、これまでお話ししていた「コツ」の決まり具合も、「基本の音色」の保ち具合も、より確かなものになっていくでしょう。

それでは、また次号でみなさまにお会いできますのを、楽しみにしています。





<

<編集後記>

今回の巻頭言は、中村顧問から頂きました。再来年度には佐渡で開催される、全日本リコーダー教育研究大会に向けた、意気込みを感じさせていただきました。会員みんなでバックアップしていきましょう。

コンテストに参加した感想書きを快諾くださいましたお三人に感謝申し上げます。それぞれのリコーダーへの取組みや歴史を教えていただきました。これからも、今まで大切にされてきたものに、新たな積み重ねをされ、発展されますよう祈念しています。

根津会長からは、「お話と音楽」の実践記をいただきました。結びでいわれているように、むしろ、子どもたちが喜んで取り組めるものと思います。是非、根津会長から資料を取り寄せ、実践してみませんか。そして、「さえずり」に投稿いただければ幸いです。

太田先生には、いよいよ本題の「楽器を鳴らす息」について執筆をいただきました。この度は編集担当の樋熊がもたもたして、大変ご迷惑をおかけいたしました。この場を通じてお詫びいたします。次年度も継続して執筆いただけますよう、重ねてお願い申し上げます。

なお、今回の原稿は、「楽器を鳴らす音」で、文字に表すには難しい音のイメージを文字と絵で説明をしていただいています。皆さん読んで、「なるほどそうだったのか」とか、「分からない箇所」、「新たな疑問」等を、寄せてくださいますよう、お願いいたします。そうしていただけると、太田先生は益々喜んでくださいますし、次回に向けての執筆のエネルギーにしてい ただけるものと思います。太田先生は、双方向通信で原稿執筆をしてくださると、当初始めてくださいました。今でもその思いは変わらないでいられます。下記のアドレスまで、是非お願いいたします。

- ◆ 投稿・問い合わせ等は、こちらにお願いします。(*^。^*)
 - ◆ 編集担当：児玉禎明(H P 担当)・吉村智宏・樋熊三津男
- 投稿・問い合わせ等は、↓こちらにお願いします。(*^。^*)

mitu3tu@gmail.com / 080-3322-1776 樋熊

